

アルベルト・シュヴァイツァーの倫理と教育の問題

笠井 恵 二

要 旨

本稿はアフリカの黒人たちに生涯を捧げたシュヴァイツァーの倫理思想を教育学の見地から考察することを試みるものである。

シュヴァイツァーは自伝において幼いころのことを回想しているが、小学生の頃、もっとも大きな感銘をうけたのは、ひとりの視学官が学校に視察にきたときのことだった。この視察官はみかけは風采のあがらない人物だったが、自分たちが使っている教科書を書いた人だったので、この出会いはシュヴァイツァーに生涯忘れえない感動を与えたのである。

次にシュヴァイツァーにとって忘れられない経験は、マウシェという隣り村のユダヤ人との出会いだった。彼がギュンスバッハの村をとおるとき、いつも悪童たちははからかってはやしたてながらついていったのであるが、そのときこのユダヤ人が怒りもせず、微笑をたたえながら通過していったその姿にシュヴァイツァーは感銘をうける。迫害のなかで耐えていることの意味を幼いシュヴァイツァーは彼から教えられたのである。

シュヴァイツァーは小さいときから父親にピアノを教えられたが、この父親の早期教育が後のパイプオルガンの名手シュヴァイツァーの誕生の土台となる。彼が8歳になると父は新約聖書を与えたので、彼は熱心にそれを読んだ。そして聖書の物語に大きな興味をもったことが、のちの世界的な聖書学者シュヴァイツァーの基礎をつくったわけである。

毎年クリスマスと新年のあいだの時期になると、シュヴァイツァーはプレゼントのお礼状を書くことを父に命じられた。これは幼いシュヴァイツァーにとって大変な苦行だったが、そのおかげで彼は人々への感謝と、それを言い表すことの大切さを学んでいく。

シュヴァイツァーは幼いときからたいへんな夢想家であり、ギューナジウムでも授業中に先生の話をお聞きせずに自分の夢の中に入り込んでしまうことが多く、成績はかなり悪かった。しかし、ヴェーマンという熱心な先生の出現で、彼はこの先生の期待に応えようと勉学に励むようになり、成績も飛躍的に向上した。やはり本当の教育というのは、口先ばかりで言うのではなく、教育者が身をもって誠実に手本を示さなければならないのであろう。

また彼は赤道アフリカで医療活動に従事しながら、原住民の教育はいかなるものであるべきかについても語っている。植民地の学校では、知的な教育と同時に、農業と手工業技術を取得することが奨励されなければならないのである。

シュヴァイツァーによれば、現代の精神は思想に対する軽蔑に満ちているので、彼自身は現代の精神と完全に矛盾してしまう。現代人は、現代の精神によって自分の思想に対する懐疑をしいられている。しかし文化人の理想とは、あらゆる状態のもとで真の人間性を示すような人間の理想を意味する。われわれにとって文化人であるということは、われわれが現代文化の状況にもかかわらず人間であることを失わないことを意味する。この彼の思想が、「生への畏敬」という一語に集約されていくわけである。

目次

1. 小学校時代
2. 父の教育
3. 実科中学校時代
4. ギュムーナジウム時代
5. 現代文明の問題
6. 文化哲学

1. 小学校時代

豊かな才能に恵まれながら、それをなげうって原始林の未開の黒人たちに生涯を捧げた二十世紀の偉人アルベルト・シュヴァイツァー（一八七五年—一九六五年）の倫理思想を教育という立場から考察していくと、彼は優れた教育者であったとも言える。まず彼の生涯を教育学という観点から考察してみよう。

シュヴァイツァーは自伝において、自分の幼いころのことを回想している。彼は最初に学校にあがることになったとき、それは彼にとって喜ばしいことではなかった。「私は学校に上がることをうれしいとは思わなかった。十月の、ある晴れた日、父がはじめて私に石板をかかえさせて、女の先生のところへつれて行ったときには、私は道々ずっと泣きつづけた。夢も素晴らしい自由もこれで終わりになるんだと、感じたからである。」（注1）

このような気持ちで小学生にあがったシュヴァイツァーが大きな感銘を受けたのは、視学官が学校に視察にきたときのことだった。彼の前で女の先生がクラス日誌を視学官にさしだすときに、あがってしまい手が震えるのを目撃した。そしてシュヴァイツァーをもっとも感動させたことは、この視察官が自分たちが使っている教科書を書いた本人だったからである。見かけは禿げ頭で小柄での腹の出た風采のあがらない男だったが、シュヴァイツァーにとっては、彼は栄光につつまれていた。先生たちが彼と普通の人と同じような態度で話をしているのが不思議に思われたのである。

もうひとつの幼いシュヴァイツァーにとっての忘れられない経験は、この出会いのすぐ後に起こった。マウシェという隣り村のユダヤ人との出会いだった。彼は家畜や土地の売買をしている人物で、驢馬をひっぱってギュンスバッハの村を通ることがときどきあった。このころギュンスバッハにはユダヤ人は住んでいなかったため、彼が村を通過するということは村の少年たちにとって大事件だった。彼らはマウシェのあとを追いかけてからかい、「マウシェ！、マウシェ！」とはやしたてた。幼いシュヴァイツァーも自分が一人前の仲間に入ったことを示すために、意味もわからずに同じことをした。しかし、髪がすでに白くなったマウシェは驢馬と同じようにひたすら歩きつづけた。ただときおり、後ろをふりかえっては、当惑げに、そしてやさしく微笑みかけた。「この微笑に私は圧倒されてしまった。迫害のなかにあってじっと黙っ

ていることが、どんなことであるかを、私はマウシェからはじめて学んだ。彼は私にとって偉大な教育者となったのである。」(注2)

これ以後、シュヴァイツァーは彼に再会すると丁寧に挨拶するようになった。またギュムナージウムにあがってからは、彼と握手をして、しばらく一緒に歩いて行くようになった。しかしマウシェの方では、自分がシュヴァイツァーにとってどういう意味を持っているかということには最後まで気がつかなかった。彼は高利貸で土地ブローカーだという噂だったが、シュヴァイツァーにとっては、いつでも寛容の微笑を浮かべているマウシェだった。シュヴァイツァーはのちのちまでも、腹が立って我慢ができなくなるようなときに、彼を思い出すことで我慢できたのである。

この二人が幼いシュヴァイツァーの心の教師ということができただろう。シュヴァイツァーの父親は、彼が学校にあがる前から古いアップライトのピアノで音楽を教えた。この父親の早期教育が後のパイプオルガンの名手シュヴァイツァーの誕生の基礎となるのである。シュヴァイツァーは楽譜を見てひくことはあまりをせず、即興的にひいたり、自分で工夫した伴奏をつけてリートや賛美歌のメロディーを弾くことが好きだった。あるとき、音楽の時間に、女の先生がずっと音符を一つ一つたどりながら、片手で伴奏なしで賛美歌をひいたことがあった。シュヴァイツァーはこれでは美しくないと思い、休み時間に、なぜ伴奏をつけて弾かないのかとたずね、むきになって和声をつけて両手で弾いてみせた。すると先生は妙に愛想よくなった。しかし先生は、その後もあいかわらず片手の指だけで賛美歌をひきつけた。「それで私は、先生のできないことで自分にできることもあるのだということにさとった。そして、自分ではごく当りまえのことと思ってやったのだとはいえ、自分の能力を先生に見せびらかしたことを、はずかしく思った。」(注3)

このようなことを経験しつつ幼いシュヴァイツァーは、理解ある人々に囲まれて健全な心を育まれつつ成長していく。また音楽に関する父親の早期教育は十分な効を奏し、のちのオルガン演奏者にして画期的なバッハ研究者シュヴァイツァーへの道を備えたのであった。

シュヴァイツァーが8歳になると、父は息子の願いを聞きいれて新約聖書を与えたので、彼は熱心にそれを読んだ。彼がもっとも興味をもったのは、イエスの誕生にさいしてはるばる旅をしてきた東方の賢者たちの話だった。幼いシュヴァイツァーが疑問に思ったのは、この賢者たちが持参してきた宝物の行方だった。そのような宝物をもらったのに、なぜイエスの両親は再び貧しくなってしまったのだろうか。それが幼いシュヴァイツァーにはふしぎなことだった。「東方の賢者たちが、それっきりもう、幼いイエスのことをまるでかまわなくなってしまったことは、私にはまるで合点がいかなかった。ベトレヘムの牧人たちが後でイエスの弟子になったことが書かれていない点も、私にはひどくおもしろくなかった。」(注4)

このような述懐からも、幼いシュヴァイツァーがまれにみる豊かな感受性と想像力に恵まれていたことが伺われる。

二年生からは習字の時間があつたが、担当の先生はそのまえの時間に高学年の唱歌を受けもっていたので、シュヴァイツァーたちが早めに低学年の授業をおえて行くと、高学年の教室の外で待たされるがよくあつた。そのようなとき、中の教室で二部合唱がはじまると、彼は卒倒するほど感動し、壁につかまっていなければ倒れるほどだった。二声の音楽のあたえる感動が、彼の身体全体にしみわたったのである。このようなことは、初めて金管楽器の吹奏を聴いたときもそうだったが、なぜか彼はヴァイオリンの音に対しては、そのような感動を余り感じなかったのである。

ここでシュヴァイツァーが音楽に対して、幼いときから人並みはずれた豊かな感受性に恵まれていたことがわかる。これにはなんらかの両親の影響もあると考えられる。

ギムナージウムの最終学年の前の年に、シュヴァイツァーは欲しくてたまらなかつた自転車を手に入れることができたが、それは成績のわるい生徒に数学を一年半教えてやることによって可能となった。それは中古の自転車だったが、それでも二百三十マルクした。しかしこの当時、人々の鑑である牧師の息子が自転車にのるなどということは、多くの人々にとって望ましいことではなかつた。しかし幸いにして、彼の父はそのような偏見にとられるような人物ではなかつた。しかし、まわりの人々の中には、牧師の息子の「思いあがつた」企てを非難する者もいた。

ここでシュヴァイツァーの父が、人々の偏見にとられることのない、子供の自由と主体性を尊重する人物であつたことがわかる。シュヴァイツァーが、教育者としては申し分のない父親をもつていたということがわかる。

2. 父 の 教 育

幼いシュヴァイツァーにとっては、いちばん不気味な場所は父の書斎だった。絶対やむをえない場合以外には、彼は決してそこに足をふみ入れることはなかつた。そこは、本の臭いがこもっており、息がつまりそうだった。その中で、父がいつも机にむかつて勉強したり書きものをしたりしているのが、恐ろしく不自然に思われた。どうして父がこのような生活に堪えることができるのか理解できず、自分はこのように一日中本の中で勉強したり書きものをしたりする人間には絶対になるまいと、かたく心にちかつたのである。

しかし成長するにつれて、「教会通信」などに父が発表する村の物語を、面白いと感ずるようになり、坐りつづけて執筆している父の生活が、少し理解できるようになった。父の文学上の模範は、スイスの作家イエレミーアス・ゴットヘルフ牧師だった。ただ父は、ゴットヘルフよりも控えめで、物語の人物のモデルになった人たちが誰であるかを、はっきりとわかるほどに描くことは避けていた。

しかし一年に一度は、シュヴァイツァーは書斎と馴染みにならなければならなかつた。それ

はクリスマスと新年のあいだで、その当日の朝食のあとには、毎年父は子供たちにクリスマス・プレゼントのお礼状を書くことを言いつけた。

それは幼いシュヴァイツァーにとっては大変な苦行で、彼はなん時間も姉といっしょに書斎のなかに坐りこんで、父が紙にペンを走らせるのを聞きながら、そして、仲間たちが教会の裏の坂道を橇にのって遊んでいることに思いを馳せながら、プレゼントをしてくれた叔父や叔母や名づけ親に手紙を書かねばならなかった。自分の生涯で、この手紙を書かなければならないということほど厄介なことはなかった、とのちに述懐している。

書くべきお礼の手紙の内容は、すべてが三つの部分から成り、同じ内容を含んでいなければならなかった。まずは贈られたクリスマス・プレゼントへのお礼を書いて、それが自分がもらった全てのプレゼントのなかで一番嬉しかったと書く。次にどのようなプレゼントを貰ったかを全て数えあげる。それから、新年のお祝いの言葉でしめくくる。しかし、これらの手紙はすべて同じ内容をもちながらもそれぞれ違った文面でなければならなかった。このひとつの部分からつぎの部分への移行を上手に書きつなぐということは、幼いシュヴァイツァーにとって大変な難問だった。そして、やっと出来上がった下書きを父親に見せなければならなかった。そして父親の指摘にしたがって訂正したり加筆したりしたうえで、最後にきれいな便箋に書きあやまりのないようにして清書しなければならなかった。

毎年六・七通書かされる手紙のうち、昼飯どきになってもまだ一通も下書きができていないことがよくあった。彼は毎年クリスマスから新年にかけて、泣きながら食事をするのが常だったのである。このことのおかげで、子どものころの彼は、書斎と手紙を書くことに対して嫌悪感をもちつづけ、この気持ちは長年消えなかった。「だからして私は、自分が叔父としてまた名づけ親としてクリスマスのプレゼントをしなければならぬような場合には、いつも、プレゼントを受ける人に礼状をよこさないでもらうことにしている。私のように、クリスマスから新年にかけて、せっかくのスープに涙の塩あじをつけさせたくないからだ。」(注5)

しかし父親が子供たちに対して厳しかったのは、この時期だけであり、普段は過ぎるほどの自由を子供たちに与えてくれる寛容な父だった。夏休み中には週に二三回、一日がかりで子供たちを山に連れていくこともあった。

この記述からわかることは、普段はやさしかった父親が、クリスマス・プレゼントをもらったときだけは、感謝の手紙を書くことを子供たちに強制したということで、厳しさと優しさを兼ねもった教育者としては理想的な父親だったということがわかる。多くの人々からの援助を仰いだ後年のシュヴァイツァーの医療活動を支えたものも、この幼い時に無理やりに書かされた手紙の訓練が、大きな助けとなったことは間違いない。最近わが国では、自己中心的で他人への配慮を欠いた若者たちが増えてきているように思うが、それは子供の顔色ばかり伺い、言うべきことや、たといいやがっても本人のために強制すべきことを避けている親の態度に大きな原因があろう。

父親に対しては限りない感謝と尊敬の言葉を書き連ねているが、母親については語ることの少ないのがシュヴァイツァーの両親に対する態度である。おそらく母親は牧師である夫の陰に隠れた非常に地味で控えめな女性だったような印象を受ける。もちろん子供たちに対しては夫と同様に豊かな愛情を抱いていたのであろうが、その表現があまり巧みな人ではなかったようである。シュヴァイツァーの姉がこの母親に対してどのような接し方をしていたのかは定かではないが、それについてはいささか興味がある。

シュヴァイツァーは、自分が最初村の学校で学んだことを、生涯の喜びにしている。そして、初等教育だけで一生をおくる村の少年たちと勉強を競い合うことによって、彼らが自分と同じ程度の能力をもっているということを知った。ギューナーナジウムで高等教育を受ける少年たちは、自分たちの方がつきはぎだらけの衣服の田舎の子どもより賢いと思ひ込んでしまうものだが、自分はそのような自惚れには決して染まることがなかったとシュヴァイツァーは述懐している。大人になってもなお彼は、昔の田舎の学校の友だちに村や畑で出会うと、彼らが自分より優れていた点をすぐに思い出す。暗算が自分より優れていた子、書き取りが自分より上手だった子、歴史の年代を全部おぼえていた子。今も村に住みつづけている彼らがああ当時、自分よりもすぐれた点を持っていたということは、いつまでもシュヴァイツァーにとっては変わらない事実だった。

このようなシュヴァイツァーの言葉は、学歴だけが人間の価値を計る尺度のように考えている多くの人々に対して、本当に大切なことは何かを教えてくれる。

3. 実科中学校時代

九歳のときシュヴァイツァーは、故郷のギュンスバッハから近くのミュンスターという町にある実科中学校に進んだ。そして毎日、三キロほどの山道を往復するようになった。ただひとりで、自分だけの思いにふけりながらこの山道を歩くのは、彼にとって本当に楽しいことだった。「そのころ往復の道すがら経験した秋と冬と春と夏のすばらしかったこと！ 1885年の休みに、上エルザスのミュールハウゼンのギューナーナジウムにはいることに話がきまったときには、私はなん時間もひとりひそかに泣きつづけた。自然のふところからもぎはなされてしまうような気がしたからだった。」(注6)

ここで、シュヴァイツァーが自然の中で思索しながら中学時代を送ったことがわかる。今日われわれのまわりで、このような豊かな自然に育まれて成長していくことに恵まれている若者はどれほどいるのだろうか。

彼は、この山道の通学路で体験した自然に対する感激を、詩に描いてみようとした。しかし彼には詩の才能はなかったらしく、最初の二三行であとは続かなくなってしまった。それではと、この美しい自然を絵に描いてみようとしたが、これも成功しなかった。それ以来、彼は詩

や絵を自分で作品にすることは断念した。しかし彼の芸術家としての営みは、音楽を即興的に演奏することに発揮されていった。

シュヴァイツァーの音楽の才能は飛び抜けており、彼はその自分に与えられた才能をよく理解し、それを最善の方向に伸ばしていったのである。

ミュンスターの実科中学校では、シェッファー牧師から宗教の授業を受講した。この人は名の通った宗教家であり、たいへんな雄弁家で聖書の物語を感銘ふかく話す才能に恵まれていた。彼がエジプトのヨセフが兄弟たちに自分の素性を打ち明ける箇所を話したときなどは、自分自身教壇で泣きだすし、聴く中学生たちも自分たちの席でもらい泣きするほどだった。

しかし今日、わが国の中学で、とくに男子学生などで、このような昔の話を聞かされて泣いてしまうほど感受性の豊かな純粋な子供がいるだろうか。われわれのまわりには情報が氾濫しているが、それに反比例して情操という点では劣ってきているのではなからうか。便利さのお陰で失ったものも大きいと思うのである。

このころシュヴァイツァーは、自分の中にもものごとくにひどく熱中する性癖のあることに気がついた。これは母親からゆずられた気質だった。シュヴァイツァーは勝負ごとをしたとき、この自分の熱中性に気づいた。どんな勝負ごとにもひどく真剣になり、相手も自分と同じように熱心にやらないと立腹した。九歳か十歳のころ妹のアデーレと遊んでいたとき、彼女が熱心に勝負せずに自分が楽勝してしまったので、なぐってしまったことがあった。このときから彼は自分が熱中しすぎることにこわくなり、一切の勝負ごとをやめるようになった。この自分の短気な性分に対して彼は悪戦苦闘したのである。

しかし、一見短所に見える熱中する性分があったからこそ、シュヴァイツァーはあのような仕事をすることができたわけである。へたをすれば過った方向に進んでしまうような、欠点にもなりかねない自分の性分を、シュヴァイツァーはもっとも良い方向にもっていったのである。

シュヴァイツァーは、幼いときからこの世の不幸に悲しんでいたと述懐している。「私は、はっきりもの心がついて以来、世の中に多くの不幸を見てなやみつつつづけてきた。ほんとうのところ、無邪気な子どもらしい人生のよろこびというものを、私はついぞ味わったおぼえがない。」(注7)

とりわけ彼が悩んだのは、哀れな動物たちが多くの苦痛と困窮を堪え忍ばなければならないことだった。コルマルで一頭の老馬が屠殺場につれて行かれるところに出くわしたことがあった。ひとりの男が棒でなぐりつけ、もうひとりが無理やりに引っぱって行くのを見かけたとき、彼はなん週間もこの光景に悩まされたのである。

こうした幼いころからのさまざまの経験によって心をゆり動かされていくうちに、シュヴァイツァーの胸に確固とした信念が形成されていく。それは、絶対やむをえない場合を除いては他の者を殺したり苦しめたりしてはいけないという信念であり、考えもなく苦しめたり殺した

りすることがどんなに恐ろしいことであるかを、全ての人が痛感しなければならないという信念だった。そしてこの信念は次第につよく彼を支配するようになる。全ての人は本当は心の奥底ではそう考えているのだが、他人から笑われることを恐れ、そして鈍感になるため、この大切な感情を認める勇気が出ないのだと確信するようになる。そして彼は、自分はけっして鈍感になるまい、センチメンタルという非難をけっして恐れるまいと心に誓うのである。

この決心が、のちのシュヴァイツァーの「生への畏敬」の信念へと発展していくのである。誰でもその人のもっとも大切な思想の土台は、その幼いときから始まっているわけである。

4. ギュムーナジウム時代

ミュールハウゼンでのギュムーナジウム時代も、シュヴァイツァーは最初は余りよい生徒ではなかった。彼は幼いときからたいへんな夢想家であり、授業中にも先生の話に耳を傾けるよりも、自分の夢の中に入り込んでしまうことがしばしばであった。そのようにして学校の成績がかなり悪かったので、両親はかなり心を痛めたが、本人には頑張って成績を良くしようという気持ちがなかった。牧師の息子ということで彼は給費生になっていたが、それも取りあげられそうになった。父親は校長に呼び出され、退学した方が本人のためだろうとまで言われた。しかしこれほど父を心配させながら、彼は夢にふけりつづけていた。

しかし、幸いなことに新しいクラス担任の先生が現われた。それはドクトル・ヴェーマンであり、この先生は毎時間周到な準備をして授業にのぞんだ。毎時間すむ分量を予定して、常に予定どおりに授業をおえた。生徒が提出する自習帳は、常に几帳面に所定の時間に返してくれた。自己を律する先生の厳しさを見てシュヴァイツァーは感銘をうけ、この先生に気に入られないようだったら面目ないと思い、先生を自分の模範とした。クリスマスのときには成績がひどく悪くて、母親はクリスマスの休暇じゅう目を泣きはらしていたのに、三ヶ月あとの復活祭のときの成績発表では、彼は優秀な生徒の中に入っていた。いかに些細なことでもいい加減にしないという先生の強い義務意識は、教育上の大きな力であり、ことばや処罰では達成できないことをなすとげることを彼は先生を通じて教えられ、その後教育者として働いたとき、この教えを実践しようとしてつとめたのである。

やはり教育というものは、口先やうわべだけのものではなく、自身が身をもって実践していくものでなければ本当の教育ということはできない。また親の方でも、子供のそのつどの成績に一喜一憂するよりも子供を信頼し、もっと大局的な目で子供の成長を見守ってやる必要があるだろう。

シュヴァイツァーは少年時代をふりかえって、次のように述懐している。「……私が自分の少年時代をふりかえってみるごとに、自分がどれほど多くの人たちに対して、彼らが私にあた

えてくれたものや彼らが私におよぼした人間的感化を感謝しなければならないかということ、切に思うのである。しかし、それと同時に、自分が少年時代に、そうした人たちに対して実際に感謝したことが、どんなに少ないかをかえりみて、後ろめたい気持ちになる。直接申しのべないうちに、彼らのうちのどれほど多くの人たちがこの世を去ってしまったことだろう。私はいくども墓前に立っては、感動をこめて声低く、かつて彼らが生きていたとき私が言うべきはずであったことばを、ひとりつぶやいた。」(注8) このようにシュヴァイツァーは、常に感謝を忘れない人であった。われわれも子供を教育するとき、成績をよくすることのみを考えるのではなく、自分をとりかこむすべてのものに「感謝する心」を育てることを大切にすべきであろう。

5. 現代文明の問題

つぎに彼の自伝的著作『わが生活と思想より』から、彼の思想を教育学的見地から検証してみよう。彼は赤道アフリカに渡って医療活動に従事し始めてから、原住民の教育について次のようなことを言っている。

原住民の教育の問題は、商業と社会の問題と関連している。シュヴァイツァーの信念によれば、農業と手工業が文化の根底なのであり、商業や知的義務に勤しむ国民層が形成され、彼らが存続するためには、これらがなければ考えられない。しかし植民地の原住民にたいしては、農業や手工業ではなく、読み書きこそ文化の始めでもあるかのような考え方で教育がなされており、また彼ら自身もそのように望むのである。ヨーロッパを安易に模倣した学校で、原住民は「インテリ」に仕立てられ、そのあげく彼らはお高くとまって手仕事をすることをいやがり、商人や知識人として働こうとする。そして商店の勘定台や役所に自分の気に入る仕事が見つからないと、なにもしないで理屈をこねまわすだけの人間になってしまう。あらゆる植民地の不幸は、学校で学んだ者が大部分、農業と手工業の発達に貢献する代わりに、かえってそれらに背を向けることにある。この下から上への階級転落は、非常に不健全な経済的・社会的状態を生みだしてしまう。だから真の植民地経営とは、未開人を農業と手工業から離れさせることではなく、むしろそれらに近づけるように教育することである。植民地の学校では、知的な教育と同時に、あらゆる種類の手工業技術を取得することが奨励されなければならない。原住民の文化の発展のためには、読み書きや勘定することに得意になることよりも、煉瓦を焼いたり、壁をぬったり、材木を板にしたり、金槌や鉋のみの扱い方を習得するほうが、はるかに大切なことなのである。(注9)

このようなシュヴァイツァーの意見をきくと、赤道アフリカでの教育と文明国の教育とは、自ずから強調点が異なってくるべきものであることがわかる。教育とは、その国、その時代、それぞれの状況に応じて、異なるべきものと、同じであるべきものとの両面があるということ

であろう。

シュヴァイツァーは現代の文明世界に対して、悲しみをこめて次のようなことを語っている。「……わたしの生のうえには二つの体験が影を投じている。その一つは、この世は説き明かしたい神秘に満ち、苦悩に満ちている、という洞察である。いま一つは、現代は人類の精神的頹廢期である、という見解である。しかし、わたしはこの両者に対して、『生への畏敬』という倫理的な世界・人生肯定にまでわたしを導いた思索によって、決着をつけた。この思想のうちに、わたしの人生が確固とした基礎と方向とを見いだしたのであった。」(注10)

だからシュヴァイツァーは、人間を思索によっていっそう内面的にも善良にもすることを望む者として、世に生き、働いつづけたのである。シュヴァイツァーによれば、現代の精神は思想に対する軽蔑に満ちているので、彼自身は現代の精神と完全に矛盾してしまう。現代人は、現代の精神によって自分の思想に対する懐疑をしいられている。しかも、この絶え間のない外的な影響に対して、彼らは反抗することができない。なぜなら彼らは過労で、冷静さを欠き、注意力が散漫だからである。そのうえ、さまざまな形体で物質的に自由を束縛されており、この現代人の宿命が、彼らの心理に影響をおよぼしている。だから彼らは、独自の思想を持たなければならないという気持ちをもちつづけることさえも、もはや不可能だと思ってしまう。「……個人的思索のうちにおいてこそわれわれは真理に到達できる、という信念によってのみ、われわれは、真理を受け入れる力を得る。深みのある自由な思索というものは、主観主義に墮することがない。自由な思索は、自分のうちにある、歴史的に真理であると認められているもろもろのものを、自分に独自の理念で動かして、それらを認識として所有することができるよう、努力する。」(注11)

このような信念に基づいて、人類の教育者たるシュヴァイツァーは、時代の波に翻弄され、自己を見失っている現代人に対して、精神において生きるように語りかけるのである。

6. 文化哲学

『文化哲学』第一部「文化の頹廢と再建」において、シュヴァイツァーは次のように語っている。近代人に対して文化を心理的にさまたげるものとして、近代人の不完全性がある。知識と能力が高度に専門化してきたことの結果、個人の活動は次第に特定の領域に限定されてきた。仕事が組織化され、個人個人は専門化することによって得た最高能率を発揮し、それによって得られた成果には素晴らしいものがある。しかしその分、労働が労働する者に対してもつ精神的な意義は失われた。人間全体が要求されずに能力の一部分だけが要求されることによって、このことが人間の本質にはね返ってくる。全体的な仕事なら人格を形成する力を帯びているのだが、全体性の薄い広い意味での精神の希薄な仕事においては、そのような力が失われてしまう。こんにちの職工は、以前の職工ほど自分の仕事を徹底的に心得てはいない。木材や金属を

加工する技にしても、他の人や機械が十分に下工作をしてくれるので、仕事のすべての段階を知り尽くしてはいない。思考力や想像力や技能が、その新しい面を要求されることがなく、創意と芸術的な工夫が乏しくなっている。そのつど全思考力と全人格を傾注しなければならない仕事だと、そこから正常な自己意識が生じてくるわけだが、それに自己満足がとって代わり、部分的な能力を磨きあげたことのみで得意になってしまう。そして部分的に熟練しているために、全体として未熟であることに気がつかない。

シュヴァイツァーは、専門主義が個人にとっても一般の精神生活にとっても精神的危険をはらんでいるということが、あらゆる職業において現れてきていると言う。そしてそれは、とくに学問において顕著である。若い人びとに個別科学同士のつながりを意識させ、自然な広がりを持った視野をひらいてやれるだけの幅をもちあわせていないような人たちが、若者たちを教育しているという事態がすでに始まっている。

仕事を組織化し専門化することは、人間の心理にとってかなり有害であるのに、そうではないように考え、専門化し組織化しなくてもすむようなところにおいてもそうしようとしてしまう。あらゆる事業において、行政面においても教育面においても、自然な活動範囲が、監督や規則によって徹底的にせばめられてしまう。「多くの国々において、こんにちの小学校の先生は、以前の小学校の先生とくらべて、どんなに不自由であろう。その教育がこういう制度のために、どれほど生気を失い人格性を失ってしまったことだろう。」(注12)

こうしてわれわれ近代人は、自分たちの仕事の仕組みのために、物質的な成果が集団作業によってめざましく向上してきた代わりに、個人的にも精神的にも多くのものを失ってしまった。しかし人間は、不自由で、非集中的で、不完全であることにともなって、人間性を喪失する危険におちいる。「近代の教育と近代の教科書においては、人間性は暗い片隅に追いやられてしまっている。人間性こそ人格教育の眼目であるのに、まるでそういうことは根も葉もないことであるかのように。現実の事態の圧力に抗して、人間性を私たちの世代のために守ってやるべきであるのに、まるでそうする必要がないかのように。」(注13)

このような近代世界の問題と教育の危機についてのシュヴァイツァーの意見は、今日のわれわれが傾聴すべき警告であろう。

『文化哲学』第二部「文化と倫理」においてシュヴァイツァーは、文化の崩壊は、人々が社会に倫理を委ねたことによって生じたと言う。文化が更新されるには、倫理がふたたび思惟する人間の仕事になり、各個人が社会のなかで倫理的な人格として自己主張をすることによってのみ可能である。これの実行の程度に応じて、社会は元来の自然的なものから倫理的なものになっていく。過去の世代の人々は、社会を倫理的に理想化するという過ちを犯した。われわれは社会を倫理的に評価し、可能なかぎり倫理的なものとしようとすることによって、社会に対する義務を果たさなければならない。そして、ここにシュヴァイツァーの主張する「生への畏敬の

倫理」こそが偽の倫理や偽の理想とたたかう武器を与えてくれる。そして、それらの武器を駆使する力は、われわれが自身の生活において人間性をまもりぬくとき、われわれの中に湧いてくる。思想と行動において、人間性を現実と対決させる人間が多くなるときに、初めて人間性は感傷的な理想たることをやめて、その本来あるべきもの、個人と社会の信念の土台となるのである。「外部から純粹に經驗的に定義すれば、完全な文化とは、人間の知識、能力および社会化のあらゆる可能的な進歩の数々が実現され、それらが文化本来の究極の目標である個人の内的完成に協力するにいたることである。生への畏敬は、こうした文化観を完成し、内部からこれを基礎づけることができる。それは、人間の内的完成を内容的に規定し、それをつねに自己を深化する生への畏敬の精神性において存せしめるということによってこれをなすのである。」(注 14) 文化の本質は、われわれの生きんとする意志において力を得ようと努めている生への畏敬が、個々の人間と人類全体に拡がっていくことにある。

シュヴァイツァーによれば、文化人の理想とは、あらゆる状態のもとで真の人間性を示すような人間の理想を意味する。われわれにとって文化人であるということは、われわれが現代文化の状況にもかかわらず人間であることを失わないことを意味するのである。

以上われわれは、シュヴァイツァーの教育思想について考察し、それが文化の理想である生への畏敬の倫理に結実することが明らかにされた。このシュヴァイツァーの思想が、今日の世界においてもなお深い妥当性をもっていることは明白であり、子供たちにも、また教育者たちにも、もっとシュヴァイツァーの生涯と思想を知ってほしいと切に願うのである。

注

- (1) Albert Schweitzer: Aus meiner Kindheit und Jugendzeit, Gesammelte Werke in Fünf Bänden, Band 1. Ex Libris, Zürich, S.259
「生い立ちの記」(国松孝二訳)、『シュヴァイツァー著作集』第一巻、白水社、1956年、211ページ。
- (2) *ibid.* S. 260-261
同、213ページ。
- (3) *ibid.* S. 264
同、218ページ。
- (4) *ibid.* S. 265
同、220ページ。
- (5) *ibid.* S. 269
同、225ページ。
- (6) *ibid.* S. 270-271
同、227ページ。
- (7) *ibid.* S. 275
同、232ページ。

- (8) ibid. S. 303
同、270 ページ。
- (9) Albert Schweitzer: Aus meinem Leben und Denken, Gesammelte Werke in Fünf Bänden, Band 1. Ex Libris, Zürich, S. 203
「わが生活と思想より」(竹山道夫訳)、『シュヴァイツァー選集』第二巻、白水社、1961年、203-204 ページ。
- (10) ibid. S. 228
同、231 ページ。
- (11) ibid. S. 232
同、234 ページ。
- (12) Albert Schweitzer: Verfall und Wiederaufbau der Kultur, Gesammelte Werke in Fünf Bänden, Band 2. Ex Libris, Zürich, S. 37
「文化の頽廃と再建」(国松孝二訳)、『シュヴァイツァー著作集』第六巻、白水社、1957年、225 ページ。
- (13) ibid. S. 39
同、228 ページ。
- (14) Albert Schweitzer: Kultur und Ethik, Gesammelte Werke in Fünf Bänden, Band 2. Ex Libris, Zürich, S. 37
「文化と倫理」(氷上英広訳)、『シュヴァイツァー著作集』第七巻、白水社、1957年、339 ページ。

